

話し手による日本語指示詞の選択 林苗 (明海大学)

1. はじめに

● コミュニケーションにおける指示詞の第一義的な機能

指示する対象に共同注意 (joint attention) を確立するため、会話相手の注意の焦点を操作することである (Diessel 2006 ; 平田2016)。

● 「共同注意 (joint attention) 確立活動」

「会話参加者が、意図する対象に聞き手の注意を誘導し共同注意を確立させようとする活動」(平田2016:28-29) である。

● 指示詞の「直示素性 (deictic feature) 」

「直示中心から指示対象までの相対的距離等の空間概念や聞き手の注意の状態に関連することにより相互行為の情報を表す」(平田2016:34)。日本語指示詞では「コ-」、「ソ-」、「ア-」をさす。

● 指示詞の「質的素性 (qualitative feature) 」

「指示対象を分類する上での情報(指示対象が物体か人か場所か、女性か男性か、単数か複数か等)を表す」(平田2016:34)。日本語指示詞では、「コ-」「ソ-」「ア-」に後接される接尾辞「-レ」「-チラ」「-ノ」「-ウ」等をさす。

5. 結果と考察

■ ここでは、「共同注意確立活動」(囲み線で示す)で、話し手による指示詞の選択分布の示し方について、1つの対話例を挙げて(図4)説明する。

■ 今回は、計48例の共同注意確立活動が抽出された。その中、1つのみの指示詞で共同注意活動が確立したケースは40例、2つ以上の指示形式で共同注意活動が確立したケースは9例であった。表2に示す。

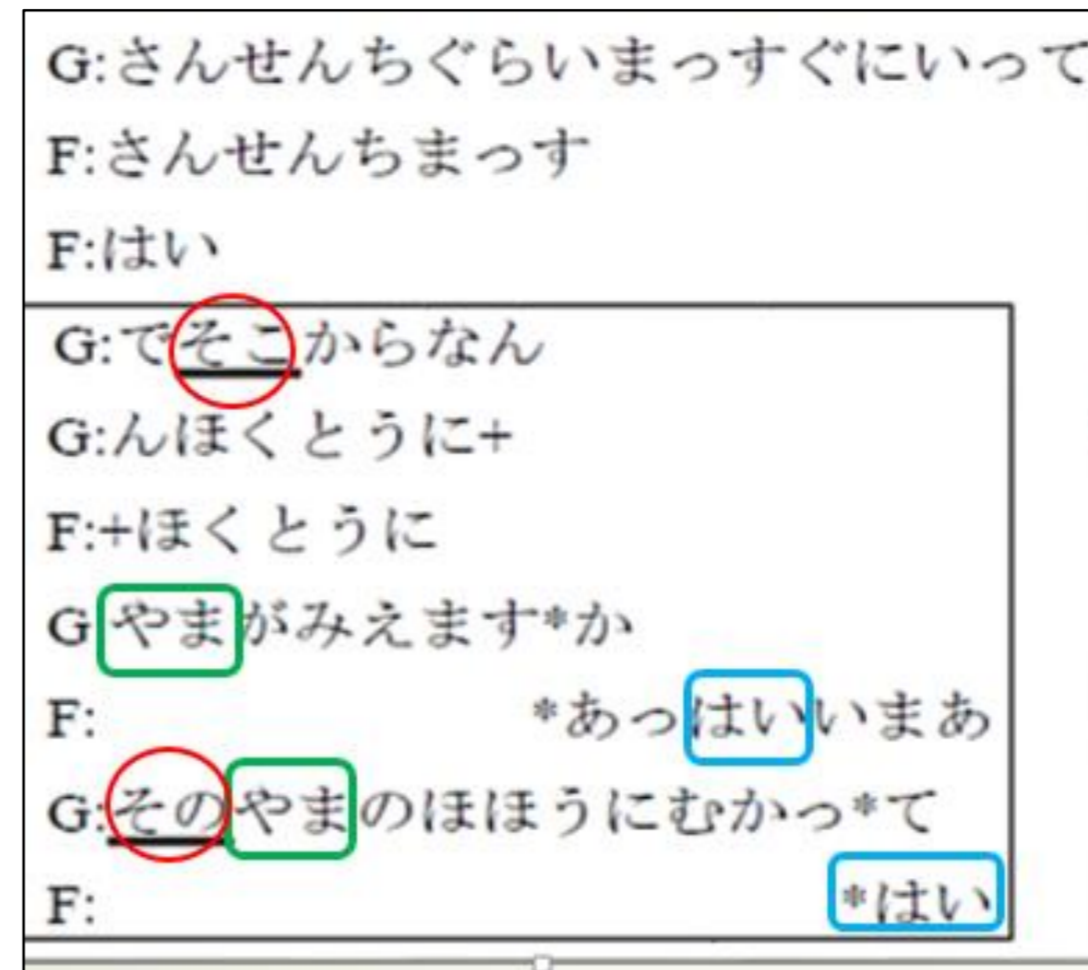


図4:「日本語名称なし地図課題対話コーパス(吉田2002)」での共同注意確立活動

対話参加者	共同注意確立活動	指示詞の使用	
		2つ以上	1つのみ
ab	6	2	4
ac	4	1	4
ba	11	2	9
bd	11	1	10
cb	4	1	3
cd	5	1	4
da	5	1	4
dc	2	0	2

表2:「日本語名称なし地図課題対話コーパス(吉田2002)」における共同注意活動で使われた指示詞

■ また、共同注意活動において、話し手による日本語指示詞の選択は、直示素性「ソ-」のほうが圧倒的に多かったことが分かった。図5に示す。

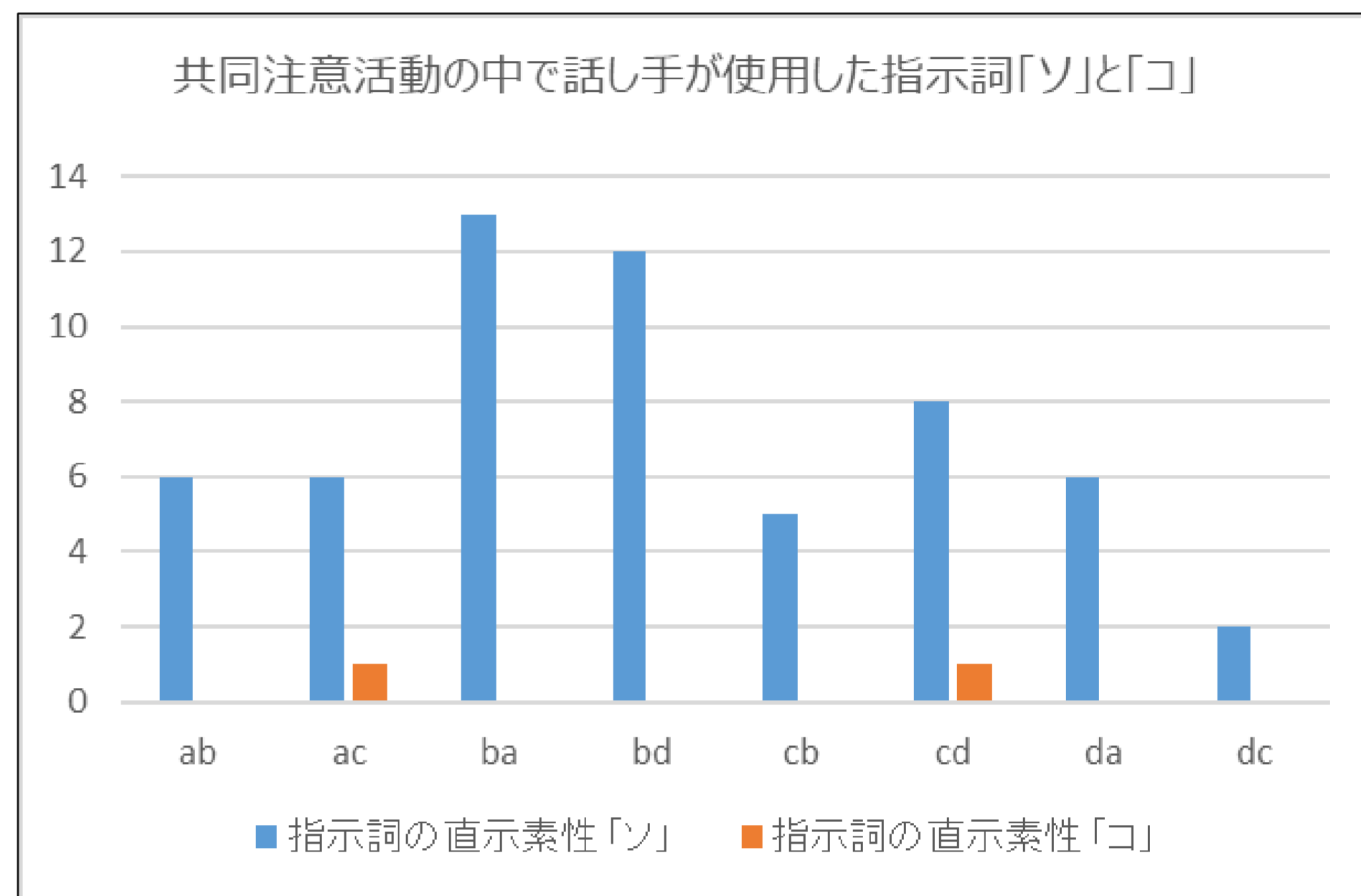


図5:「日本語名称なし地図課題対話コーパス(吉田2002)」における共同注意活動での話し手による指示詞の直示素性「ソ」と「コ」の選択

2. 先行研究

① 平田 (2016) は日本語母語話者の自然会話データを用いて、ダイクシス (deixis, 「直示」とも呼ばれる)用法において、共同注意確立活動で話し手による指示詞の質的素性の選択を調査し、分布傾向(図1)および選択のバリエーション(図2)を提示している。

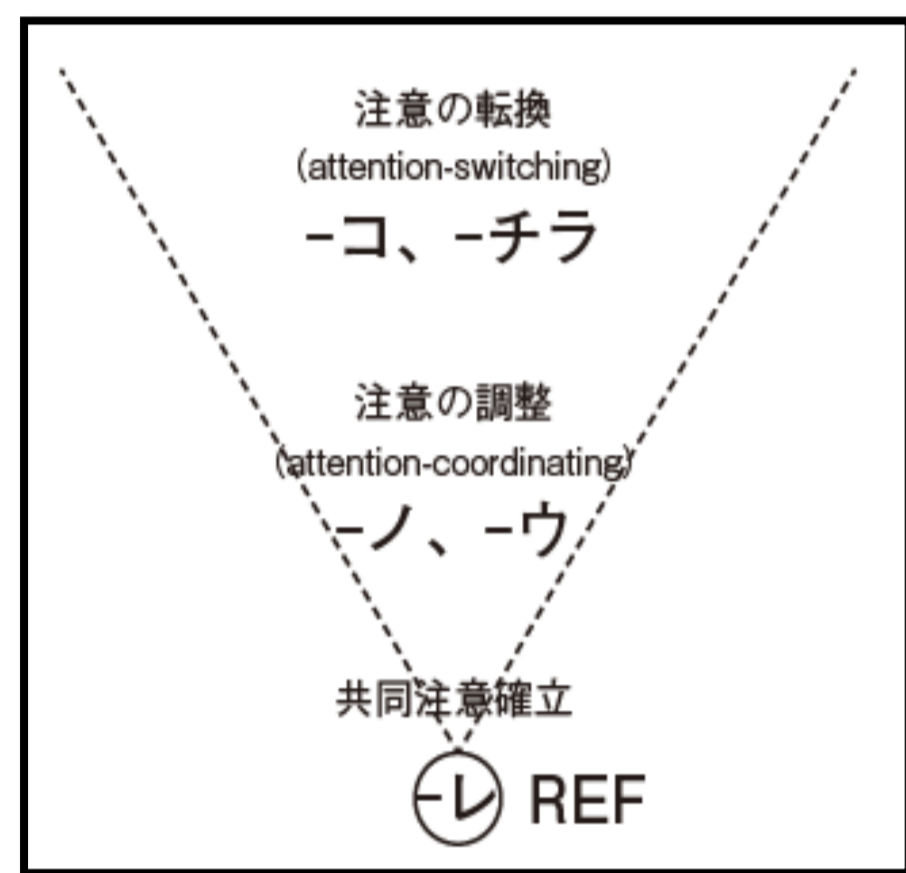


図1:共同注意確立過程における話し手による指示詞の質的素性の分布 (平田2016:40)

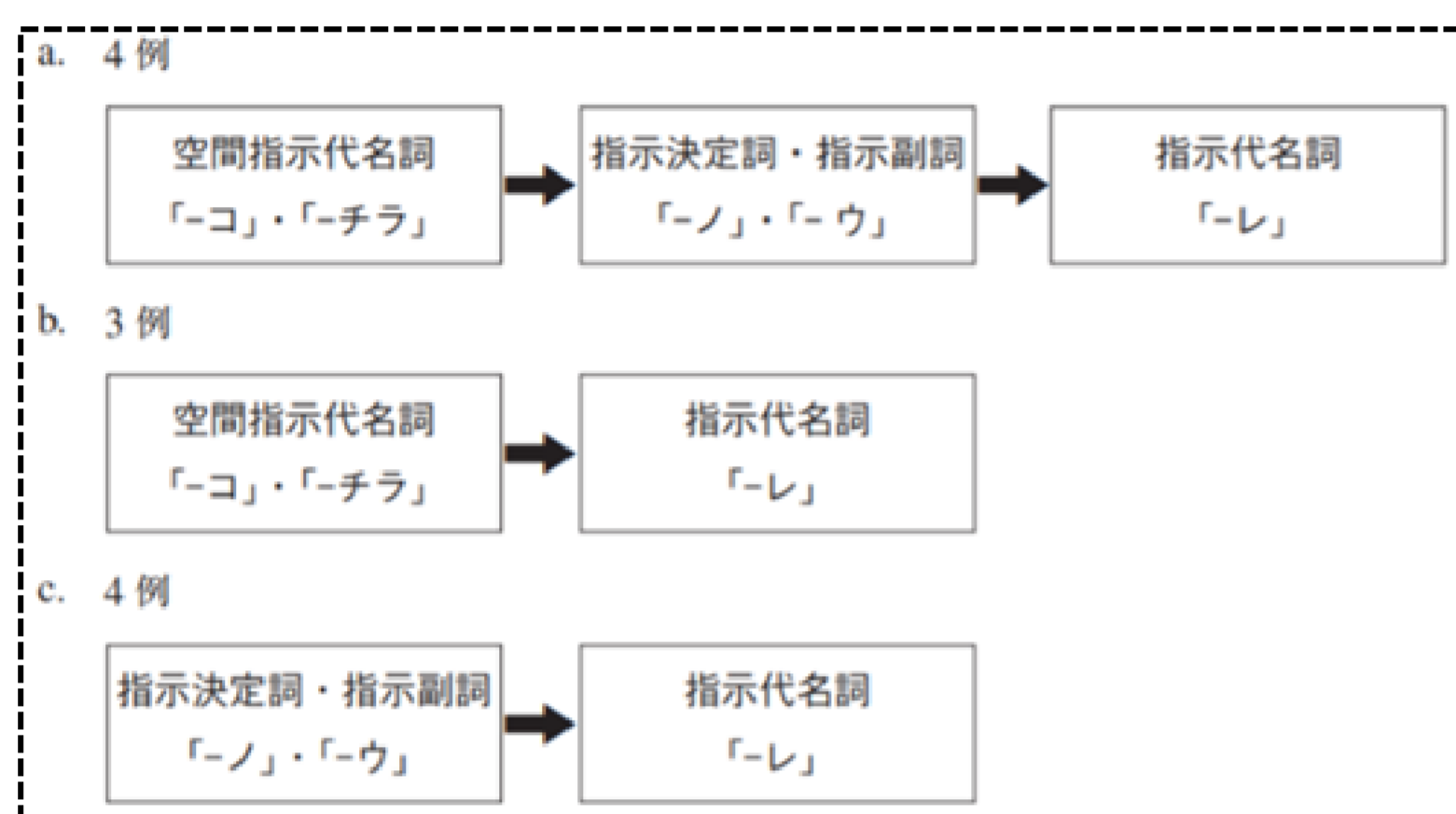


図2:ダイクシス用法における話し手による指示詞の質的素性の選択バリエーション (平田2016:36)

② 林 (2020) は「日本語名称なし地図課題対話コーパス(吉田2002)」を用いて、非ダイクシス用法*において、共同注意確立過程で話し手による日本語指示詞 (2つ以上) の質的素性の選択バリエーション (表1) を明らかにした。

*この「非ダイクシス用法」は、指示対象がダイクシス的な(物理的に存在する)ものである、と同時に照応的な(言語的文脈に言及される)ものでもある、という「ダイクシスと照応を統合した」用法である。

タイプ	数	質的素性の選択
Aタイプ	6例	「-コ」→「-ノ」 (これは、平田2016の結果と異なったもの)
Bタイプ	2例	「-コ」→「-レ」
Cタイプ	1例	「-ノ」→「-レ」
Dタイプ	1例	「-コ」→「-ノ」→「-レ」

表1:「日本語名称なし地図課題対話コーパス(吉田2002)」における非ダイクシス用法での話し手による指示詞の質的素性の選択バリエーション (林2020:5)

3. 研究目的

■ 共同注意確立過程では、話し手による日本語指示詞の直示素性の選択バリエーションを明らかにする。

4. 研究方法

◆ 使用データ:「日本語名称なし地図課題対話コーパス (吉田2002) 」

- 対話参加者: 日本語母語話者4名(男性2名、女性2名)。
- 対話時間: 全8対話を収録したもの、計115分。
- 収録: 会話する際に双方の顔のみが見えるが(視線や表情の確認できるが、身振り手振り等のジェスチャーはできない)、お互いの手元の地図を見えないようにする仕切りを用いて会話を交わしながら課題を行う場面で収録した。
- 地図: 4枚の異なる地図を使用した。
- 地図課題: 2人の参加者に課される課題は、情報提供者(G)の地図上の経路を情報追従者(F)の地図上に再現する。



図3:地図課題 (左は情報提供者G、いわゆる話し手の地図で、右は情報追従者F、いわゆる聞き手の地図である。なお、本来の地図は著作権の関係で公開できないが、図3はイメージとして筆者が作図したものである。)

◆ 分析方法

- 分析単位: コーパスデータの性質上、図3のように、ある物が話し手の地図にはあるが、聞き手の地図にはない、ということになっている。そのため、本研究は、1つの指示対象を特定するまでに、話し手が1つもしくはそれ以上指示詞を用いた指示が行われる「共同注意確立活動」を分析単位とする。
- 質的分析: 対話におけるジェスチャー等のダイクシス的な情報が禁じられている。そのため、本研究は言語的文脈といった非ダイクシス的な情報から、話し手が非ダイクシス用法における指示詞の直示素性の選択を示し、考察を行う。

6. まとめにかえて

- 話し手と聞き手は、対面の形で、1つの指示対象を特定するいわゆる共同注意確立過程で活動が行われた。日本語指示詞における指示領域からみると、「対立型」における指示詞の選択のため、直示素性「ソ」と「コ」の使用が観察された。
- 共同注意確立過程において、話し手は聞き手に指示対象を特定させるため、日本語指示詞の直示素性「ソ-」のほうが相対的に多く使われた。
- また、指示対象が特定できなかったケース(図6)も見られた。図6のように、指示詞の質的素性「-ノ」に後接される(例えば「どしゃくずれ」が「がけ」等)実質名詞が、会話参加者の間に確認されることが必要である。そのことによって、指示対象がより特定されやすいと考える。

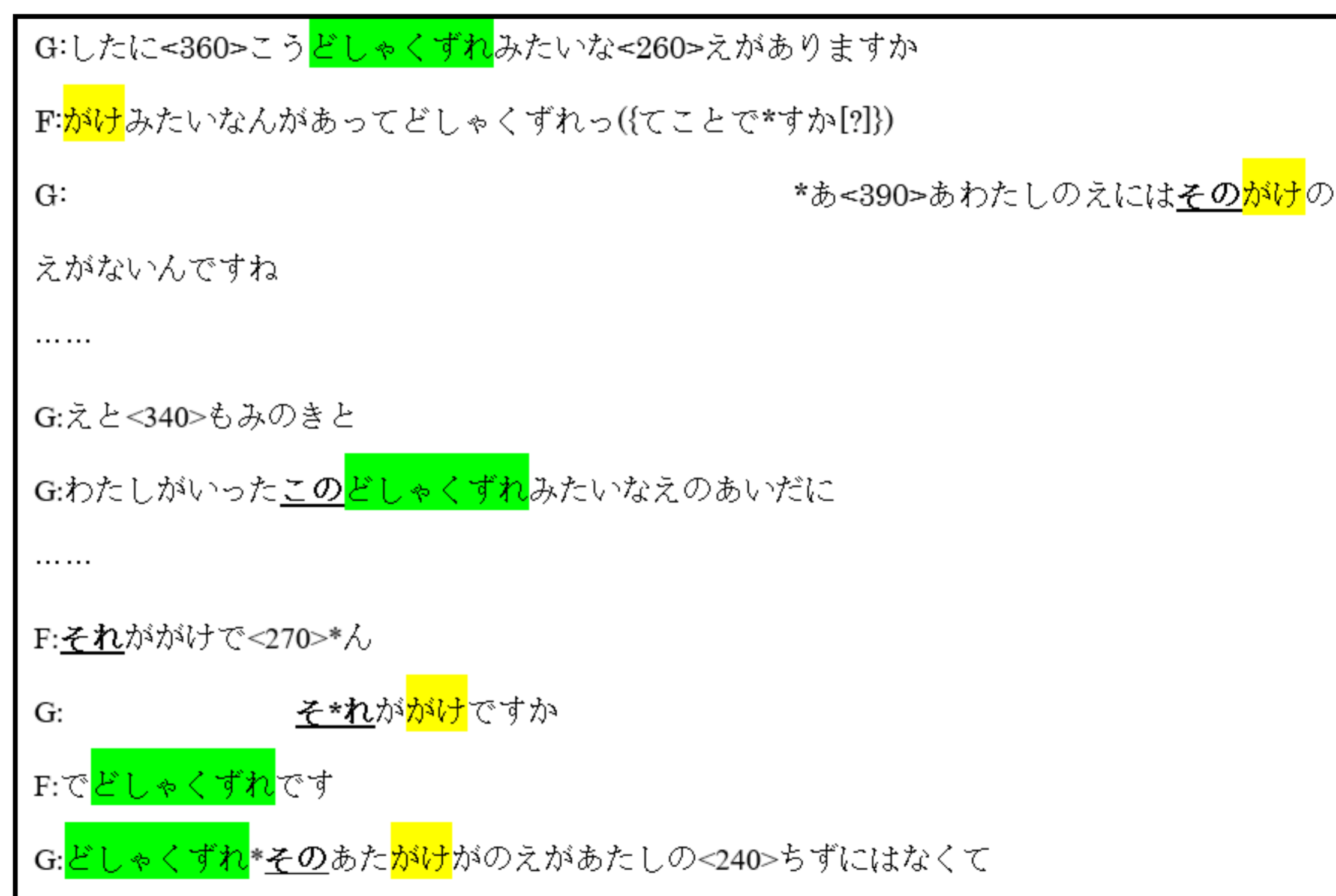


図6:指示対象が特定できなかった対話ケース

- なお、本研究の結果は、日本語母語話者は指示詞をどのように使うかという規範として、日本語学習者の中間言語においては、どのように母語話者の使用規範に近づくかを検証するために役立つことができるという点で意義がある。
- コミュニケーションでは、話し手は意図する指示対象を聞き手に特定させるため、指示詞(直示素性と質的素性)をどのように使うかを明らかにすることによって、話し言葉におけるAI人工知能自動通訳・翻訳などに応用可能と考える。

参考文献

・Diessel, H. 2006. "Demonstratives, Joint Attention, and the Emergence of Grammar." Cognitive Linguistics 17, 463-489.
 ・平田未季 (2016) 「共同注意確立過程における話し手による指示詞の質的素性の選択」『語用論研究』18, pp.28-47, 日本語学論学会
 ・林苗 (2020) 「話し手による指示詞の質的素性の選択—共同注意確立過程における非ダイクシス用法—」『2020年度日本語教育学会支部集會予稿集』(東北支部), pp.3-8. 日本語教育学会
 ・吉田悦子 (2002) 「日本語名称なし地図課題対話コーパスの概要と転記テキストの作成:報告」『人文論叢』19, pp.241-249. 三重大学人文学部文化学科

コーパス:

吉田悦子 (2020): 三重大学 日本語地図課題対話コーパス (MapTask-Mie) . 国立情報学研究所 音声資源コンソーシアム (データセット). <https://doi.org/10.32130/src.MapTask-Mie>

謝辞: 本研究では、国立情報学研究所 音声資源コンソーシアムから提供を受けた「三重大学 日本語地図課題対話コーパス (MapTask-Mie)」を利用した。ここに記して感謝の意を表す。